はじめに

本書は、2017年7月2日に行われた、成城大学大学院文学研究科・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共催、成城学園創立100周年・大学院文学研究科創設50周年記念シンポジウムにおける研究の成果をまとめたものである。

このシンポジウムは、「私たちの知らない〈日本語〉――琉球・九州・本州の方言と格標示――」と題し、下地理則（九州大学）、新永悠人（国立国語研究所）、坂井美日（国立国語研究所／日本学術振興会特別研究員）、竹内史郎（成城大学）・松丸真大（滋賀大学）の各氏を講演者とし、風間伸次郎（東京外国語大学）、木部暢子（国立国語研究所）の両氏をコメンテータに迎えて行ったものである。専門的な内容であるにもかかわらず多数の一般の方々のご参加があった当日は、今まさに消えつつある言語・文化の保存を促し、そのことが「日本語」の新たな多様性の発見へとつながってゆくことの重要性を示した。さらには、日琉諸語における主語の格標示の振る舞いに分裂自動詞性が散見されること、そしてその振る舞いに取り立て性が関与していること等が明らかとなった。

このシンポジウムの成果を論集としてまとめるにあたり、コメンテータとして参加された風間伸次郎氏、木部暢子氏にも執筆者に加わっていただくこととなり、またあらたに、佐々木冠氏（立命館大学）にも寄稿をお願いした。こうして本書の体裁と内容が整うこととなった。

目次にある通り、本書は6つの章からなるが、それぞれの章は完結した論文であるので、ぜひともどこからでも読み進めていただきたい。ただ、本書の第1章から第5章は、そのタイトルからわかるようにテーマが統一されており、なおかつ編集の際、各章の配列に十分配慮したということがある。このため第1章から第5章までを通読されることもぜひおすすめしたい。

第1章の下地論文は現代日本共通語（口語）における格標示と分裂自動詞性について論じるが、そうであるだけでなく、本書への導入という役割を担っ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

ている。以下第 2 章の坂井論文では熊本市方言、第 3 章の竹内・松丸論文では京都市方言、第 4 章の新永論文では沖縄県久高島方言というように、格標示と分裂自動詞性という観点からさまざまな言語における考察が展開されていく。第 5 章の佐々木論文では、本書の第 1 章から第 4 章までを総括し、並びにそれぞれの章にコメントを加える。第 6 章の風間論文は、本書のタイトルが示すところにこだわらず、特別に執筆していただいたものである。飛び抜けて広い視野からの考察が示されているが、本書の各章の内容に深く関わっているのは間違いない。通言語的研究ないし言語類型論の立場から、日琉諸語における情報構造と文形態の関係を記述するためのヒントが示されている。そして、本書は木部暢子氏による「おわりに」で締めくくる。

本書の内容は、国内での伝統的な日本語研究の流れを汲む者と一般言語学を前提に日本語研究を行う者との対話が基盤となっている。研究者としての出自が異なる者同士がしっかりと対話を行うならば、当然そこにさまざまに可能性を見出し得るはずであるが、このような意味で一つの可能性をここに形にしてお示ししたつもりである。そして編者らは、本書が予想を大きく越えた「日本語の姿」を明らかにしたものであり、また、記述・理論の両面であたらしい日本語文法の研究であると信じている。お読みになった方々には、それぞれに本書の各章を比較対照してお考えをめぐらしていただき、またの機会、ご批判・ご批正等を賜ることができればまことに幸いである。執筆者一同の心からの願いである。

荻原典子氏の本書の企画に対するご理解と編集の過程における多大なご苦労がなければ、本書がこうして世に出ることはなかったはずである。末筆ではあるが、ここに御礼申し上げたい。なお、本書は JSPS 科学研究費補助金「日本語の分裂自動詞性」（代表 竹内史郎）の研究成果の一部であり、その資金の援助を受けている。

2019 年 1 月

竹内史郎

下地理則

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

はじめに …… i

第1章
現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性
…… 下地理則　1

第2章
熊本市方言の格配列と自動詞分裂 …… 坂井美日　37

第3章
京都市方言における情報構造と文形態
――格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性
…… 竹内史郎・松丸真大　67

第4章
沖縄県久高島方言の文法関係と情報構造の関係 …… 新永悠人　103

第5章
第1～4章へのコメント …… 佐々木冠　129

第6章
語順と情報構造の類型論 …… 風間伸次郎　141

おわりに …… 木部暢子　177
索　引 …… 179
執筆者一覧 …… 183

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第1章

現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性

下地理則

1. はじめに

現代日本共通語（以下、共通語）は、主題標示されない環境（例えば中立叙述）において自動詞主語（S）、他動詞主語（A）がガ格を取り、目的語（P）がヲ格を取る対格型となるというのが定説である（角田 1991、佐々木 2006）[1]。しかし、これはフォーマル文体の極にある文語において成り立つ特徴であって、インフォーマル文体の極にあるくだけた口語では、以下のように中立叙述でPが格助詞を伴わないパターンも決して珍しくない。

（1）a.　太郎が外で遊んでる。　　【S：ガ】

1　正確には、主語や目的語という言語個別的な基準で定義されるカテゴリーと、通言語的比較を意図して使われる概念であるS、A、Pは同一概念ではない（Haspelmath 2011）。AとPは、典型的な他動詞文（動作主（agent）が、直接的な影響を対象（patient）に与えるイベント：「殴る」「折る」など）の取る格フレーム（日本語なら【ガ－ヲ】）および、その格フレームが適用されるほかの非典型他動詞文における2項を表す（Comrie 1981、Andrews 1985）。つまり、日本語では【ガ－ヲ】を取る主語・目的語をA、Pと呼ぶことになる。一方、「（彼に）（金が）要る」などの【ニ－ガ】という格フレームを取る2項も言語個別的な基準から主語・目的語と認定できるが（角田 1991）、これらはA、Pとはみなされない。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

熊本市方言の格配列と自動詞分裂

坂井美日

1. はじめに

熊本市方言には伝統的に、目的語標示1種「バ」(1)、主語標示2種「ガ」「ノ(／ン)」(以下「ガ系」「ノ系」)がある(2)。

(1) 目的語：つぼバたおした。「壺を倒した。」

(2) 主語：a. K ガたおした。「K が倒した。」(個人名はイニシャル)ガ系
b. ねこノうまれた。「猫が生まれた。」ノ系

本稿は、これら熊本市方言の中心格(目的語と主語の格)について、高齢層のデータと若年層のデータを扱いながら、現在進行中の変化の中で、自動詞分裂現象が起こっているということを述べる。本稿の要点は、次の通り。

a. 伝統的なハダカ制限
高齢層の伝統的な体系では、有形標示を省くこと(以下「ハダカ」と称し「φ」で表す)を許容しない。(例えば(1)(2)を、「つぼφたおした」「K φたおした」「ねこφうまれた」とすると非文判断。)標準日

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

京都市方言における情報構造と文形態

格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性

竹内史郎・松丸真大

1. はじめに

言語の統語記述を行う際に、他動詞文と自動詞文の主要項がどのように標示され、それらの配列がどのようなパターンとなるのかということは基本的かつ重要な課題である。こうした課題に取り組む際に、文法関係や意味役割に目を配るだけでは不十分で、主題や焦点といった語用論的役割ないしは情報構造的役割までをも考慮しなければならないことがある（Lambrecht 1994、2000、下地 2016 など）。本稿は、京都市方言の統語記述に語用論的役割の考慮が不可欠であることを示し、このことをふまえ、この方言における情報構造と文形態との対応がどのようなものかを考察する。

通言語的に見れば、情報構造のあり方に応じた文形態の特徴づけにはさまざまな形態統語的な手段や韻律的な手段が用いられるが、現代の京都市方言においては格による標示とイントネーションによる標示がその手段となる。本稿では、まず格標示の振る舞いを、次にイントネーション標示の振る舞いを観察して、そして両者がどのような関係にあるかということに言及する。興味深いことに、格標示においてもイントネーション標示においても分裂自

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

沖縄県久高島方言の文法関係と情報構造の関係

新永悠人

1. 概要

本稿では、沖縄県の久高島で話されている方言(以下、久高島方言)の文法関係(主語と目的語)と情報構造(主題と題述)の関係を考察する。久高島方言には、主語を示す有形の標識(主格)が2種類(*=ga* と *=nu*[1])ある(詳細は2節を参照)。一方、目的語を示す有形の標識は存在しない。主題は *=ja* で示され、題述は *=du* で示される(詳細は3節と4節を参照)。これらの標識はその存在によって常に特定の機能(主語、主題、題述)を標示する。しかし、これらの機能を表す際に、必ず有形の標識(*=ga*、*=nu*、*=ja*、*=du*)を使うわけではない。主語であっても *=ga* や *=nu* が付かない場合、主題であるのに *=ja* が付かない場合、題述であるのに *=du* が付かない場合は存在する。本稿では、考察対象となる語(幹)に助詞が一切後続しないことを「ハダカ」と呼ぶことにする。ハダカを考慮に入れた上で、久高島方言における文法関係と情報構造の標示方法をまとめると、以下の表1のようになる。

1　それぞれの標識のイコール(「=」)は接語境界を示す。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

第1～4章へのコメント

佐々木冠

1. はじめに

主語と直接目的語の格配列には（1）に図示する5つの型がある。A、S、S_A、S_P、Pは、それぞれ、他動詞主語、自動詞主語、動作主的な自動詞主語、対象的な自動詞主語、直接目的語を表すものとする。対格型と同様にA＝S≠Pの格配列の体系でPが形態的に無標で主格（A＝S）が形態的に有標の場合、有標主格型と呼ばれる（格配列の類型についてはDixon 1994および角田2009を参照されたい）。

（1）　対格型：A＝S≠P、能格型：A≠S＝P、活格型：A＝S_A≠S_P＝P、三立型：A≠S≠P、中立型：A＝S＝P

格配列を左右する要素としては、名詞句が担う文法関係（主語、目的語）、意味役割、名詞の内在的な意味などがあることが指摘されている。内在的な意味により名詞が（2）に示すような階層をなし、それが格配列を左右するという考えは、Silverstein（1976）の分裂能格性の分析で提案されたものであり、階層のあり方についてはさまざまなバージョンが提案されている。分裂能格

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

語順と情報構造の類型論

風間伸次郎

1. はじめに

本稿の中心となる主張は、以下の4点である。

(1) a. SVOを基本語順とする言語（以下「SVO型言語」とする）のS（つまり、主に文頭で動詞の前に位置する名詞）は、基本的に定の名詞でなければならず、さらに主題となる強い傾向がある。それゆえに文全体が新情報である文焦点の文では、動詞の前の位置を空所にしたり、仮主語にするなど、一定の統語的操作が必要となる。これに対し、SOV型言語では文焦点の文において特に特別な統語的な操作を必要としない。つまり、基本語順と情報構造標示の間には密接な関係がある。

b. SVO型言語のSが主題兼主語でなければならないのには、必然的な理由／類型論的な内的関連性がある。その理由は共時的な観点からも説明が可能で、通時的な変遷の事実からも支持される。

c. SVO型言語のSには、「主題となり得る限り（／新情報でない限

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

おわりに

「私たちの知らない〈日本語〉——琉球・九州・本州の方言と格標示——」という魅力的なタイトルのシンポジウムが、成城大学大学院文学研究科と国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の共同で 2017 年 7 月に開催されました。その成果が論集として刊行されたことを、まず心から喜びたいと思います。

私たちは、〈日本語〉が音韻的にも文法的にも語彙的にも、また談話的にもバリエーションに富んでいることを経験的に知っています。誰に聞いても「日本には方言がたくさんあって、聞いても分からない方言もある」と言うでしょう。では、「日本にいくつの方言があるか、それぞれはどう違っているか」と問われたら、ほとんどの人が答えられないのではないかと思います。東条操は『日本方言学』(1953) の中で、本土方言を 21、琉球方言を 3 つに区分しました。しかし、これは枠組みをかなり大きくとった場合のことであって、実際には、方言の数はこれよりも大きな数値になります。たとえば、東条 (1953) では北海道方言が 1 つの区画となっています。しかし、北海道の中にもたくさんのバリエーションがあります。他の方言も同じです。そうすると、日本にいくつの方言があるのか見当もつかない、ということになります。じつは、これが現実なのです。

「それぞれがどう違っているか」ということになると、さらに回答が難しくなります。研究者でもなかなか答えられません。もちろん、これまで地理的なバリエーションや日本語の歴史に関する研究はたくさんあり、大きな成果を生んでいます。しかし、それらを総合して、また、外国の人にも理解できるような枠組みで〈日本語〉を考えることは、これまであまりありませんでした。2017 年のシンポジウムとその成果であるこの本は、それを目指したものです。「私たちの知らない〈日本語〉」というタイトルには、このようなメッセージが込められているのです。

私は 2010 年に国立国語研究所に赴任し、ユネスコ 2009 年の “*Atlas of the*

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

World's Languages in Danger”（世界消滅危機言語地図）のリストに載せられたアイヌ語や琉球・奄美・八丈などのことばの記録・保存・復興のプロジェクトを運営しています。その中で下地さんや竹内さんたちの研究に触れ、私自身、これまで知っているつもりでいた〈日本語〉のことを何も知らないということを実感しました。「知らない」ということを「知る」ところから、いろいろなことが始まるということを、本書を通じて読者のみなさんが経験してくださることを願っています。

2019 年 2 月
国立国語研究所
木部暢子

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers